

# ボランティア活動における 心理臨床家のアイデンティティ

—軽度発達障害児のグループ支援活動・F2サークルの実践と課題—

伊崎 純子

A Clinical Psychologist's Identity in Volunteer Work

Junko Izaki

## 1. はじめに

### ①心理臨床家のアイデンティティ

心理臨床家の国家資格化が暗中模索の状態である。2005年に国家資格への法整備が検討されかけたが、結局一度も国会で審議されることなく、政治の波に飲まれて今なお拾い上げられることなく漂い続けている。2005年に議員立法として国会に提出されようとした際に、2資格（臨床心理士と医療心理師）1法案が狙上についた。現在、心理臨床家を名乗るにあたって必要とされる資格が既に複数あり、中でも（財）日本臨床心理士資格認定協会によって認定される「臨床心理士」が権威あるものとして、たとえば就職の際に有利な資格として認識されている。全国保健・医療・福祉心理機能協会から「医療心理師」の国家資格化の動きがでてきたために、既に医療分野のみならず、教育・司法矯正・産業・保健福祉など多様な分野で機能している「臨床心理士」の国家資格化はどうか、2資格間における業務の調整が難航した。医療現場における国家資格としての心理関係職の必要性は間違いのないとしても、医師を含めた医療関係者との関係をどのように規定するのか、法制化にあたって情緒的にも実現可能性において

も現実との融合をどのように図るのが問題となった。

現在先行して存在する「臨床心理士」は、「こころの健康」が問題となる前述したようなあらゆる領域においても、その研修・教育内容から一定の知識と技能をもって処することが出来る人物であることを認定するものである。

しかしながら、多方面にわたって使える資格は、その専門性が逆に曖昧なものとなりやすい。誰をあるいはどのようなグループを対象にした臨床を志すのか、臨床家個人の興味関心のもち方や努力によって知識や技術面での専門性は深められている。

## ②軽度発達障害児

特別支援教育が謳われ、自立支援法が成立し、障害児者を取り巻く環境は今日大きく変化している。特に外見上は障害をもっていることがわかりづらいために周囲の理解や協力を得られにくかった軽度発達障害児が一定の割合で存在することが公表され、注目されるようになったことは朗報だと考える。軽度発達障害児とは、知的能力での発達は軽度であっても、その多動性や学習面での特異性から仲間はずれにされたり、自尊心を傷つけたりしやすく、社会性の発達においては軽度な障害とは言いがたい子どもたちのことである。

健常児が日常を過ごす場を多様な選択肢から選ぶ可能性に比べて、障害をもつ子どもが選ぶ可能性の幅は未だにせまく、近隣の幼稚園や学校に行けなかったり、友達とのトラブルが原因で公園で遊びづらかったりするものが現状である。就学後も学校が休校の土曜、日曜、祝日、長期休暇期間中、家の外に居場所を見いだせず、家にこもらざるをえない親子がいる。

## ③目的

その障害の特性を理解し、その生きづらさを緩和する目的で活動しているグループが少数ながら存在する。活動グループを必要とする子どもたち

の数に比して、活動を運営する専門家の絶対数は少なく、その活動が、「障害児療育の専門家」ではない「専門家としての心理士」に委ねられたとき、なんらかの工夫が必要になることは想像に難くない。障害児療育は専門外であることを理由に活動の運営依頼を断る潔さも時には必要とされる。それは、分別というものだろう。しかしながら、筆者は「専門家ではない」ことを伝えた上で、関わることを選択した。

筆者のオリエンテーションは「母子臨床」にあり、主に乳幼児期から児童期の子どもとその親に対する心理的支援を行ってきた。児童相談所において関わる事例に障害を抱える子どもも少なくなかったが、心理判定に携わっても通常の療育活動にはそれほど関わっていない。今回「障害児療育の専門家」ではない立場から軽度発達障害児を対象としたグループ活動に関わるようになった。本小論では、「障害児療育の専門家」としてではなく、臨床心理士としてのアイデンティティから関わったグループ活動の支援について整理し、報告する。その上で、心理臨床家としてのアイデンティティについて考察したい。

## 2. 活動に至るまでの経緯

それは、一通のメールから始まった。知人の臨床心理士を通して紹介された「とちぎYMCA」の担当者である藤生氏より軽度発達障害児のグループ活動（以下、F2サークルと呼ぶ）の支援を要請するメールであった。

F2サークルは、栃木県小山市において2000年に東京学芸大学障害児教育学科小池敏英教授研究室の協力をあおぎ、小学生を対象にソーシャルスキルトレーニング（以下、SSTと記載する）をプログラムの中心に据えて活動を行ってきた。「F2」という名称も、小池研究室が地元で既に立ち上げていたグループ名が「F1」だったことに由来する。F2サークルの運営はとちぎYMCAが担当してきた。指導を主に担当してきた大学院生の卒業に際し、5年にわたり指導をしてきた東京学芸大学が撤退する

ことになった。小学校を卒業するメンバーの子どもたちは宇都宮でとちぎYMCAが主催する小・中学生を対象とするレインボークラブへ移行することから、活動を停止することも考えられたが、この県南地域でのグループ活動を必要とする子どもたちのために存続を模索したいとの申し出であった。とちぎYMCAは最初、筆者に小池研究室に代わる指導を希望したが、その当時、発達科学部は開設されたばかりで1年生しか在籍しておらず、入学者の募集を停止した短期大学部も卒業を目前にした2年生と夜間部の2・3年生が在学するのみで、研究室単位での協力は2年後まで不可能であった。加えて、筆者は臨床心理士として児童相談所で心理判定員をしたり、乳幼児健康診後のフォローアップグループを担当したりしたことはあっても、障害児の教育・指導の専門家ではないため、指導・助言を求められても自信がないことを伝え、学部としては地域支援活動の一環として学生ボランティアの募集に関してのみ協力可能であることを返事した。

2004年度の活動は小池研究室が指導に関わる最後の年であったが、引き継ぎを意識し、講義を利用して学生ボランティアを募り、短期大学夜間部の2年生と発達科学部児童教育専攻1年生が2名ずつ、計4名が手を挙げ、3学期の活動（5回）を見学参加することとなった。

翌2005年度より、白鷗大学のみが学生ボランティアとして協力する体制が作られた。とちぎYMCAとの話し合いの結果、筆者は指導者ではなく協力者として位置づけ、運営ならびに指導は今までの経験の蓄積を生かしてこの活動にずっと関わってきた藤生氏が担当することになった。2005年度のボランティアは、前年度参加した4名に23名新たに加わり、短期大学夜間部3年生4名、発達科学部2年生6名、同1年生17名、合計27名で始まった。実習などを考慮し、1学期5回を3回に減らし、年間9回の予定でスタートした。

2006年度は、短期大学部の廃止に伴い、発達科学部3年生6名、同2年生14名、合計20名がボランティアとして登録した。さらに伊崎ゼミナール

の学生は、授業の一環として最低1度はボランティア活動に参加することが義務づけられた。年間9回の活動を15回に戻すことも考えられたが、運営・指導を担当する藤生氏の異動もあり、学生の実習や土曜日の授業を勘案し、年間9回の実施を維持することとなった。

2007年度は、発達科学部4年生2名、3年生11名、同2年生5名、教育学部1年生1名、合計19名が登録している。さらに、伊崎ゼミナールの学生10名のうちF2サークル経験者が3名いたことと、障害児者の心理に関心のある学生が半数以上を占めることから、積極的なボランティア活動への参加が認められた。ゼミナール生の参加により、教員もまた学生との橋渡しのみならず、活動当日にも協力する日数が増えた。また、藤生氏と協議の上、2学期は間が空きすぎることから4回とし、全体で10回の活動を行うことになった。

以上の主活動の他に、YMCAが主催の1泊2日サマーキャンプが毎年開催されており、2004年度2名、2005年度1名が参加、2006年度は参加者がいなかったが、2007年度は6名がボランティアとして参加した。

追記すべきこととして伊崎ゼミナールの学生は、F2サークル以外のボランティア活動体験として、小山市子ども発達支援センターリズム園の土曜教室にも積極的に参加していることをあげておきたい。そこでは、常磐大学島田茂樹准教授研究室が中心となって活動している。F2サークルと大きく異なるのは、教員が指導者として関わっている点であり、「障害児の専門家」がそこでは大きな役割を持っている。

### 3. F2サークルの活動概要

3学期制 1学期3回から4回 年間2回は1日活動とする

土曜日 午後2時から4時（スタッフは準備と片付けのため1時から5時まで）

場所 原則として栃木県立県南体育館（研修室／柔道場）

参加者 軽度発達障害を抱える小学生 5～10名程度

保護者の見学は随時可能

有料（年間2万5千円）とちぎYMCAが管理

#### 4. F2サークルの活動経過

2004年度以降のF2サークルの活動を列挙すると次のようになる。

2004年度 SSTを基礎に、具体的には①自己コントロール（葛藤場面の対処、行動のコントロール、感情のコントロール）②他者との関係（コミュニケーション能力、話し合いのスキル、感情理解、人との関わりに対する意欲的な姿勢）③集団参加（ルール理解、的確な状況の判断、役割の遂行、臨機応変な対処、自主的な活動の組み立て、学校以外での社会的場面でのルール、スキル）の指導を目標に、プレーメンの音楽隊の劇・マジック・デイキャンプ（公共交通機関を利用してボウリング、スタジオパーク見学）を通してプログラムを作成していた。

2005年度 年間9回

1学期 <資料紛失>

2学期 新しい仲間をたくさん作ろう

仲間と協力して、ペープサート（紙人形劇）をしよう

10/29 デイキャンプ「白鷗祭に行こう」

12/3 クリスマス会で発表しよう① 同②

12/17 クリスマス会で発表しよう③ クリスマス会

3学期 新しい仲間をたくさん作ろう

計画と準備の大切さを学ぼう

2/18 デイキャンプを計画・準備をしよう① 同②

3/4 デイキャンプを計画・準備をしよう③ からだを動かそう

3/19 デイキャンプ「子ども総合科学館に行こう」

2006年度 年間9回

1 学期 新しい仲間をたくさん作ろう

仲間と協力して、ペープサート（紙人形劇）をしよう

- 6/3 自己紹介をしよう ペープサートをしよう①
- 6/17 ペープサートをしよう② からだを動かそう
- 7/1 ペープサートをしよう③ ペープサートを発表しよう

2 学期 F2サークルの仲間ともっと親しくなろう

F2サークルの仲間と協力して活動を楽しもう

- 10/21 グループを作ろう グループで楽しもう
- 10/28 デイキャンプ「白鷗祭に行こう」
- 12/2 クリスマス会をしよう

3 学期 F2サークルの仲間と協力して活動を楽しもう

計画と準備の大切さを学ぼう

- 2/17 からだを動かそう デイキャンプを計画・準備しよう①
- 3/3 デイキャンプを計画・準備しよう② 同③
- 3/17 デイキャンプ「子ども総合科学館に行こう」

2007年度 年間10回

1 学期 仲間と協力して、ペープサート（紙人形劇）をしよう

- 5/19 ペープサートの準備・練習をしよう① からだを動かそう
- 6/2 ペープサートの準備・練習をしよう② 同③
- 6/30 ペープサートの準備・練習をしよう④ 同⑤

2・3 学期 現段階では白鷗祭においてペープサートを披露する体験を通して、自己効力感を高めることを狙って活動をする予定である。

東京学芸大学が主に担当していた2004年度までと白鷗大学が主に担当するようになった2005年度以降は表面的な活動の内容は変わらなかったが、

次第に SST が掲げるような行動の変容を目的としたものではなく、活動自体を楽しむことや友達づくりがテーマになって来たように思われる。

## 5. ある母親とのやりとり

2006年7月のこと、F2サークルに参加している子ども（以下Aとする）の母親（以下Bとする）からインフォーマルに連絡をもらった。F2サークルの連絡先はとちぎYMCA・藤生氏であり、協力者としての筆者の連絡先は公開していない。Bは、別の集まりにスタッフとして来ていたF2サークルとは関わりのない学生を通じて、メールアドレスのメモを届けて来たのである。

藤生氏にも伝えることをBには伝えた上で、何度か個人的なやりとりをした。

AとBは2005年度からの参加者である。Bは非常に積極的で、新しい子どもを何人もF2サークルに誘い、紹介した。その一方で、Aは活動へ意欲的なときと否定的なときとがあり、噛みつく・わざと紙を破る・紙を食べる・ペンで壁に落書きをする・部屋を飛び出すといった行為が目立ち、スタッフは対応に戸惑いを隠せなかった。Aは次第にF2サークルへ参加することへの興味を失っていった。くわえて2学期は、用事もあるので休むことになっていた。そのような状況でBからの突然のアプローチだった。

Bの最初の問合せは「F2サークルの活動プログラムに参加者の児童や保護者の希望も取り入れてもらうことは可能か？」という内容だった。これに対して、可能だと思うが藤生氏に相談したい旨返事をし、藤生氏に以上のやりとりを伝えた。この時点で、Bは筆者を指導者として認識し、活動プログラムは筆者と学生で作成していると勘違いをしていた。また学生リーダーがいないことへの不安、見学したSSTを中心にした活動とは違うF2サークルの内容に違和感があったことなどもメールから推察され



た。これらの内容が藤生氏ではなく筆者に連絡が来たことで藤生氏は「私は障害児教育の基礎的な勉強はしておらず、現場での経験だけで今までやってきました。」「私自身は指導者ではなく、コーディネーターであると認識しています。」という感想を寄せた。

これに対しては、筆者自身も障害児指導のプロではないことを改めて強調した上で、心理学的知見から2つの提案を藤生氏に対して行った。1つは「保護者にF2サークルへ期待するものは何かをアンケートすること」であり、2つ目は「アンケートの結果を受けてF2サークルの方向性を定めること」である。

保護者が期待するイメージは具体的には2つに大別されると考えられた。一つは、SSTを主体とし、自分で自分の気持ちを把握し、行動を調整できるようにゲーム等を用いつつ「トレーニング」し、その効果を「測定していく」というものである。もう一つの期待されるイメージは、「余暇の上手な過ごし方の一つ」とし、友達やボランティアと土曜の午後を一緒に過ごし、ゲーム等を通じて「自信をつけ」「楽しさ」を共有するというものである。

前者が東京学芸大学指導の流れを汲む活動の方法に近く、Bの期待するものと思われた。後者は白鷗大学が主体となって関わるようになってからの活動状況であり、それぞれに利点がある。前者はかなり「構造化」されているので、かなり重い症状の子どもも目的が明確な分、対応しやすいが、「指導者」が必要になる。後者は融通がきき、自由度が高いため、学生は自分の持ち味を発揮しやすい。F2サークルが療育を目的としたグループなのであれば、やはり前者は魅力的である。指導者に指導料を払って来てもらう必要があり、保護者に新たな出費をお願いせざるを得ないかもしれない。「そこまでは…」という場合、保護者全体に声をかけ、ボランティアで参加できる保護者と相談しながら、活動プログラムをたてていくことが考えられた。

藤生氏とのやり取りの結果、2006年度2学期前の活動を計画するミー

ティングに保護者2名が参加し、子どもや保護者の希望を取り入れる活動を行った。しかしながら、Aへの対応がうまくできないまま2006年度を終え、結局、2007年度よりAとBはF2サークルをやめて、同じとちぎYMCAが運営する別のサークルへと活動の場所を変更した。

## 6. 課題

### ①「障害児療育の専門家」ではない引け目

このようなグループ活動の指導者として関わる場合には、診断（どのような障害であり、何について困っているのか）について確認し、治療（結果を予測しつつ、関わる手段を整える）を行い、研究（自らの行動を社会的に共有できるよう公表する）する。そのためには、知識と技量が少なくとも必要であり、さらに経験があればなおよい指導者として関わるのが可能だ。

「障害児療育」に関する知識と技量、経験いずれも不足していると感じた筆者は、少なくともF2サークルで5年間の経験をもっている藤生氏に指導を託し、学生ボランティアスタッフと藤生氏を橋渡しする協力者として自らを位置づけた。

ところが、前述したようにある母親からのメールをきっかけとして、藤生氏も自らを指導者ではなくコーディネーターとして位置づけていることが明らかになった。指導者不在のグループ活動という問題が明確になったのである。

### ②コーディネーター (coordinator) という仕事

さて、コーディネーターとは何か。広辞苑によれば、「物事を調整する人。特に、服飾・放送などでいう」とある。藤生氏は、F2サークルと保護者との間、学生と参加児童との間、会場やとちぎYMCA との間の調整を自らの仕事とし、マネジメントに徹してはいなかったか。それに気づく

ことなく、筆者は藤生氏に参加児童のみならず学生の指導をも一任してはなかつたろうか。このディスコミュニケーションが問題の一つだった。

あらためて、心理臨床家の専門性ということについて簡潔にまとめた。鱸ら（1983）は、心理臨床家の専門性として4つの軸をあげている。中心となる3つの軸は、診断的側面、治療的側面、研究であり、4つ目としてリエゾン（調整的機能）をあげている。

「コンサルテーション・リエゾン精神医学」という概念が精神医学にはあり、精神疾患と身体疾患を合併している患者に対する複数の診療科の協力体制のあり方を述べたものであり、そこにおいては身体科の医師が治療の主体であり、精神科医は助言者の役を担う。「相談あるいは助言を意味するコンサルテーションは、身体科治療を受けている患者に何らかの精神的問題が生じてから、他科からの診療依頼という形で発生する。一方つながりあるいは連絡を意味するリエゾンでは、精神科の専門家が身体科治療チームの一員に加わっている。そこでは、コンサルテーションと同様に既に発生した精神的問題に対応する役割に加えて、いかに精神的問題の発生を予防するかという役割も担っている。（白波瀬、2004）」これは、精神科医に限った役割ではなく、臨床心理士が担う役割でもあり、職場の風通しをよくすること・つながりをよくすることとも換言できる。筆者は、指導者ではなく協力者という位置づけで関わり始めたときから、ここでいうリエゾン機能を自らの役回りであると認識していた。直接の指導は藤生氏に依頼し、そこで生じた学生の不安や課題に対してフォローが出来ればと考えていたのである。そして、障害児療育に対する多少の知識を学生とともに学んでいければと思っていた。徐々に筆者が直接参加する比率が高まるにつれて、保護者も筆者の位置づけに戸惑ったのであろう。

これらの枠組みの曖昧さが招いたメールによって「指導者の不在という問題」が明らかになったが、元来、障害児療育の専門家は需要よりも少ないのであり、F2サークルだけの問題とは思えない。人的資源の限界を踏まえて、模索できる道もあるだろう。

Bはメールで「小山でグループ指導を受けられるのはF2だけだと思  
う」と書いていた。新規の子どもをたくさん紹介してくれたのもF2サー  
クルをなくさないように、という思いの表れだろう。保護者が必要だと思  
うサークルをボランティアで維持するというのは大変な仕事である。ボラ  
ンティアであるため、そこには謝礼は発生せず、ボランティアの自発性と  
献身、責任感が頼りである。「何かを教える」だけでなく、「場を提供し続  
ける」コーディネーターとしての役割を藤生氏は担っている。

### ③今後の展望と課題

指導者不在のまま活動を維持し、筆者が「臨床心理士」としてのアイデ  
ンティティを支えに関わり続けるのであれば、主要な3つの仕事（診断・  
治療・研究）は難しくとも、リエゾン機能としての役割をもっと積極的に  
取ることも打開策としては検討に値する。今まで筆者は学生と藤生氏との  
間のつながり、学生同士のつながりのみに注目していた。しかしながら、  
例えば今回のメールの件も、単純にスタッフサイドと保護者とのコミュニ  
ケーション不足がF2サークルの活動を難しくしている原因だったのでは  
ないだろうか。仮に、Aがうまく参加できていればこのような「突然の」  
申し出はなかっただろう。こちらとしては「突然の」アプローチで驚いた  
が、Bにしてみると、参加して以来くすぶっていたものかもしれない。他  
の保護者との間でも、何かしらディスコミュニケーションが生じている可  
能性もある。

概して、保護者は勉強熱心である。わが子の将来のため、今何が必要  
か、何が提供可能かをいつも模索している。具体的な提案ももっており、  
経験のない教員や学生の机上の空論よりもずっとまじなことも多い。自ら  
が関わると参加率も上がるのは、子どもに限らず保護者にとっても同じで  
あり、保護者がプログラム立案時に参加することで、F2サークルはさら  
に盛り上がっていくであろう。ただし、「子どもを預けてちょっと休憩し  
たい」保護者には、敬遠されるおそれもある。

Aへの対応がうまくできずに終わっているが、2004年度に比べて2005年度の回数が少なくなったことが原因だろうか。年9回が例えば15回になっても、再び、何かあれば、隔週24回だったら、毎週だったら…という話になり、回数が増えると学生ももっと参加を強いられるので、今のように集まることは無理である。学生は「障害児指導」を自分の学びの中心にしているのではなく、主体は健常児の教育であり保育であるのだ。その中で障害児ボランティアにも興味があるという学生が多く参加している。もし、回数を増やす場合は、例えば主体となる学生は「ゼミ生」として、参加を義務付けねばならなくなるだろう。そのあたりは、「養護学校教諭」免許をとれる宇都宮大学や東京学芸大学と事情が異なる。

これらの事情を保護者に説明したり、保護者のニーズを聞き取り学生が考えるプログラムに反映させたり、今後は藤生氏と学生との橋渡しのみならず、保護者とスタッフとの橋渡しを意識的に行うことが、筆者にできることではないだろうか。

「心理臨床家は法的には存在しないということを十二分にわきまえて、自己の専門性を高めるよう努力しなければならない。(鏞・名島、1983)」——この『心理臨床家の手引き』が出版されて20年あまり、「カウンセリング」や「癒し」がブームになり、心理臨床家育成のための大学や大学院での系統だった講義も組織化され、当時2千名あまりだった「心理臨床家」は「臨床心理士」の認定を受けたものだけでも1万5千名を超える人数となっている。それでも、法的に存在しないことにはかわりない。専門性を高める努力を怠った結果、来談者のこころを傷つけているにも関わらず、それに気づかず独善的な臨床に陥っているのではないかという反省を常に心がけることが大切だと感じる。

## 7. 謝辞

活動を支援してくださるとちぎYMCA、中でもF2サークルの運営を

伊崎 純子

7年も携わってくださっている藤生強氏、自発的に参加してくれる学生スタッフ、そして活動の中心にある子ども達と子ども達の日常を支えている保護者ならびに関係者の全てに感謝致します。

## 8. 文献

西阪昇 2005 臨床心理士と国家資格. 臨床心理士報, 16 (2) (通巻29号) 財団法人 日本臨床心理士資格認定協会. pp. 1-2

白波瀬丈一郎 2004 コンサルテーション・リエゾン精神医学. 小此木啓吾・深津千賀子・大野裕編 改訂 心の臨床家のための精神医学ハンドブック. 創元社. p.575

鑪幹八郎・名島潤二 1983 心理臨床家の手引き. 誠信書房. p.17